

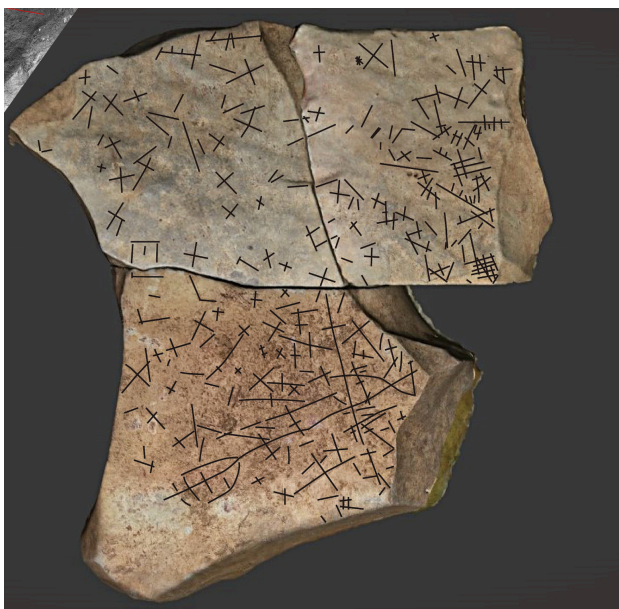
「葬送のコスモロジーと弥生文化の十文字刻み」 関連資料

2024年12月14日 北條芳隆

1 点検過程の現状

事実関係

- a) 箱式石棺墓の蓋石はカンラン石玄武岩製で本来は1石であり、有明海対岸の多良岳の海岸付近から採取されたものが吉野ヶ里遺跡まで海路運搬されたのち、おそらく遺跡内で刻線が施されたうえ分割された（図1）。
- b) 蓋石用の石材は6分割され、うち1石は石棺の頭部側小口石に用いられ、十文字刻線面を内側に向けて配された。なお小口石は抜き取ることなく埋め戻されたため接合関係は不明（図2）。
- c) 蓋石1は刻線面を棺の内側に向けて頭部付近を覆う格好で被せられた。
- d) 蓋石2と3は接合面を合わせる形で刻線面を上にして足下側を覆う格好で被せられた（図3）。
- e) 蓋石2と3に刻まれた線刻は磨り切り技法で彫られているため線の中心部分が最も深く、端部は浅い。蓋石1の十文字も磨り切り技法であるが、長い直線や曲線までが磨り切りとは断定できない。



左：図1 蓋石の接合関係

上：図2 頭位側小口部の十文字刻線



図3 石棺墓蓋石の状況（中央が蓋石2、右が蓋石3）

解釈案

① 遺骸の足下側を覆う2枚の蓋石（蓋石2・3）の上面に刻まれた無数の十文字刻線

* 高田裕行氏は「吉野ヶ里遺跡からみた夏の銀河説」を提唱（図4）。

② 遺骸の頭部側を覆う1枚の蓋石（蓋石1）の下面（内側）に刻まれた十文字や曲線からなる刻線

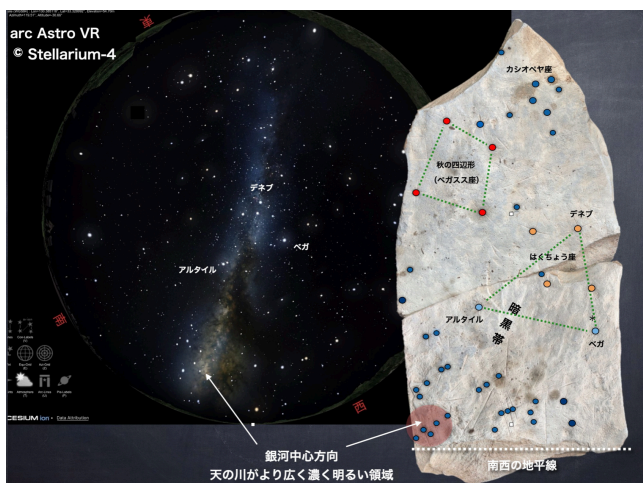
* 北條芳隆・弘中正芳氏は①と②はセットで描かれたとみなし、②は「吉野ヶ里遺跡からみた地上の情景説」（絵地図）を提起（図5）。

* 高田旧説は全天図の鏡像・反転された星図（図6）。

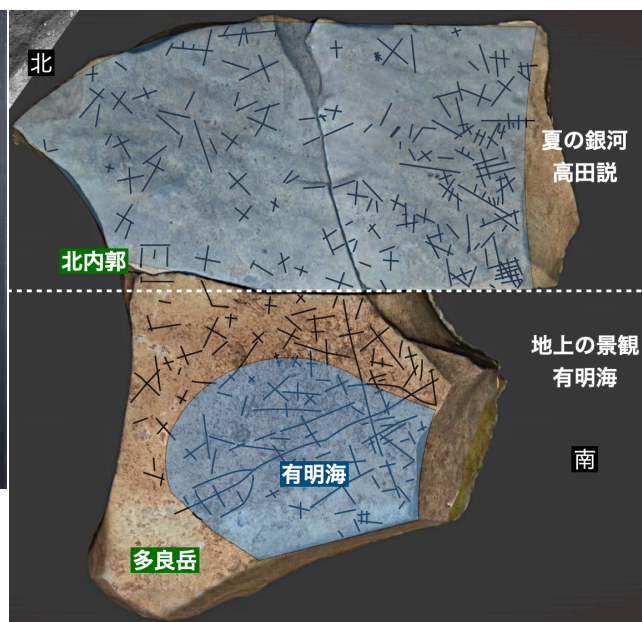
* 高田新説は「天の北極を目指す死者の魂を運ぶ船説」を提起（図7）。

解釈案の問題点と課題

* ①の構図について積極的に否定する根拠はない。ただし蓋石の上面に刻線文が刻まれる事例をどう解釈するかが課題。類例は二塚山遺跡1号石棺墓と瀬ノ尾遺跡石蓋土坑墓（図7）。吉野ヶ里遺跡377区SX1762から出土した、墓域での祭祀にもちいられた壺の口縁部（図8）。



上：図4 蓋石2と3「夏の銀河」



右：図5 「夏の銀河」と地上の絵図



図6 「夏の銀河」と反転星図

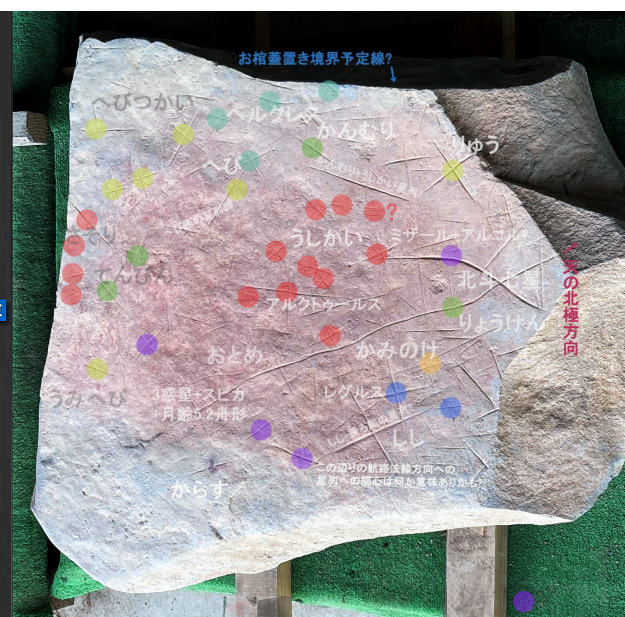


図7 高田最新案



図8 吉野ヶ里町瀬ノ尾遺跡石蓋土坑墓の蓋石

SYT-II 377区 SX1762

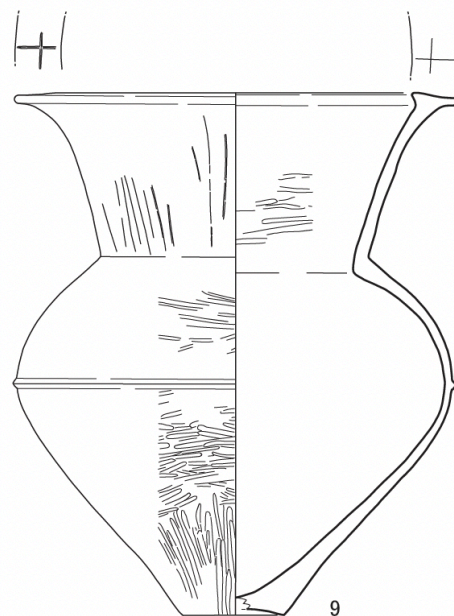


図9 吉野ヶ里遺跡377区SX1762

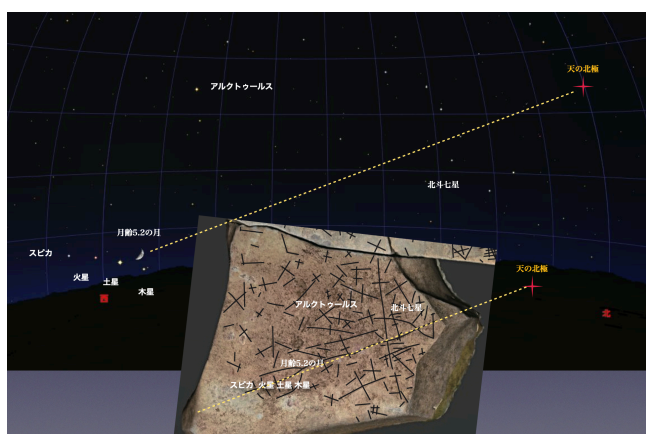


図10 高田最新案の再現



図11 蓋石1の刻線と方位

*②の北條・弘中説は全体を一連の構図とみる点では合理的な説明が可能。しかし遺骸の上方に地上の景観を示す意図を説明できず、小口部にも十文字刻線があって遺骸側に向けられる事実との関係も説明できず、なによりも十文字刻みが地上の景観に施される理由を説明できない。

*②の高田最新案は、214年6月30日に現れる5日の月のごく近隣に木星・土星・火星の3惑星が直列して並び、スピカまでが一行に並ぶ非常に印象深い情景を基礎におき、北斗七星を介して天の北極に死者の魂を誘う星空の情景だとする、非常に具体的な解説案である（図10）。それとともに、箱式石棺墓の被葬者の頭の位置に被せられた蓋石1の刻線と方位関係は、実際に北（みなし北辰）の範囲を向く事実には注目したい。有望な案だといえる（図11）。

*②の高田新説は、遺骸の頭部上面に天体図を配することと、それが「北の北極（北辰）に向う死者の魂を乗せる船を描く」との解釈となり魅力的に感じる。のちの装飾壁画古墳の天井に描かれる星辰図との整合性も指摘できそうである。頭部側小口部の十文字も星辰とみなす方向性も担保する。

*②の高田新説は、蓋石1の情景と蓋石2・3の情景が両者の境界で描き分けられたとするものであり、境界線は必ずしも明確でなく、境界を跨いで刻まれたモチーフもある点が課題。

2 今後の検討課題

① 瀬ノ尾遺跡石蓋土坑墓蓋石上面の十文字刻みとの関係把握

* 吉野ヶ里遺跡の東側丘陵に広がる吉野ヶ里町瀬ノ尾遺跡石蓋土坑墓上の十文字刻みに関する高田説は全天図案（図12）。ただし土坑墓自体の軸線は真北から12.1°西に振れ、蓋石は高田説での南の星を北方向に向けて被せられている（図13）事実があり、整合性をどうみることが課題。

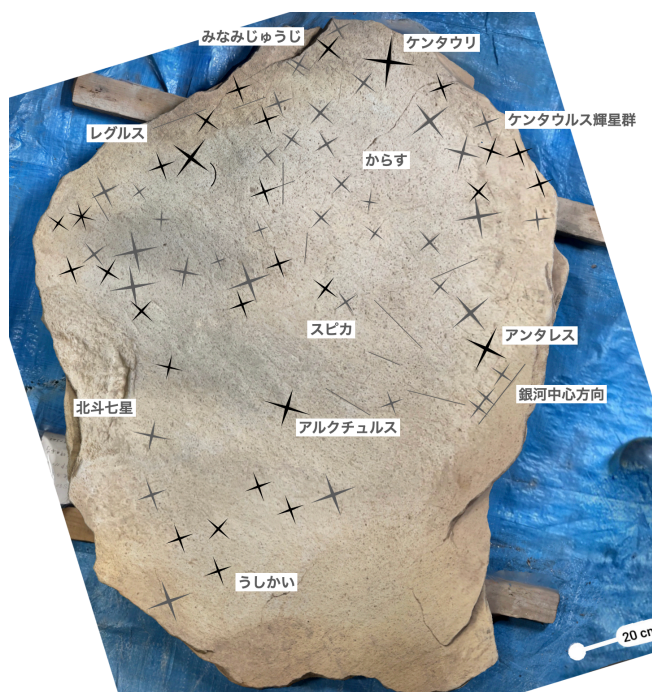


図12 瀬ノ尾蓋石 高田案（全天図）

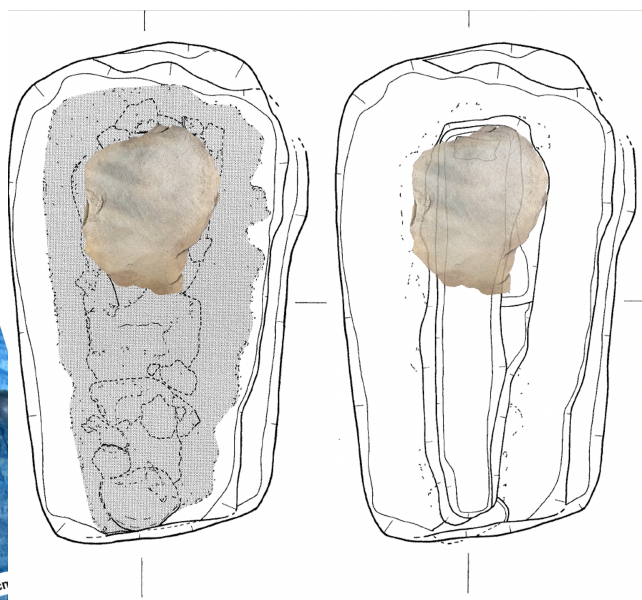


図13 瀬ノ尾石蓋土坑の方位

② 古代中国の画像石や墓室内壁画に描かれた銀河の事例収集

* 古代中国では西王母信仰・七夕伝承との関係で銀河が位置づけられており、後漢代の画像石や、5世紀代の高句麗地域の高句麗古墳墓室内壁画に銀河（天漢）や関連する星座が描かれる。小南一郎氏1984年の著作『中国の神話と物語り』（岩波書店刊）で紹介された事例を図14に転載する。このうち図14内の「図4」に提示された高句麗大安里1号墳壁画については大林太良氏1999年の著作『銀河の道虹の架け橋』（小学館刊）でも引用されている。高句麗の壁画古墳にはまだまだ類例はありそう。

③ 弥生時代の遺構や遺物に刻まれた十文字の事例収集

* 現時点において、土器への線刻は先に紹介した吉野ヶ里遺跡例のほか、福岡市博多遺跡群出土の古墳時代前期の壺口縁部に施された事例を見つけている（図15）。×印自体はさほど珍しい事例ではないとの心証を抱くに至っている。

* なお辰巳和弘氏は彼の2011年の著作『他界へ翔る船-黄泉の国の考古学-』（新泉社刊）において、佐賀市東山田一本杉遺跡30号甕棺の事例を紹介し、中華人民共和国四川省成都市商業街から出土した戦国時代の船形木棺の身に刻まれた十文字図文の酷似を指摘している（辰巳2011, 252-253頁）。掲載図を図16と図17に転載した。ただし辰巳氏が指摘する2例は、ともに十文字の先から枝が伸びる状態であり、やや特異。東山田一本杉遺跡例について常松幹雄氏は「束ねた稲束を十字に結わえた『稲魂』の象徴だと解釈している（常松1998）。

* 比較的名なものは島根県荒神谷遺跡から出土した銅剣と銅鐸の一部に施された十文字刻みである。このうち銅剣については358本中の9割以上に十文字が施されていた（図18）。

* 現時点の資料収集状況をみれば、死者の埋葬に関わる遺物ないし土中に埋納された遺物群に十文字刻みが頻出することまでは指摘できそうである。ただし星のモチーフだとは断定できない。



図1 孝堂山画像石



図2 南陽画像石



図3 郟県石棺



図4 大安里一号墳壁画



図5 徳興里古墳壁画

図14 小南一郎1984『中国の神話と星物語り』に掲載された星辰図

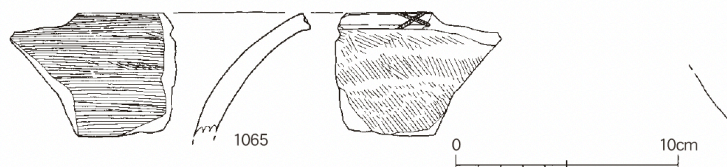


Fig.114 SC091000 出土遺物実測図② (1/3)

図15 福岡市博多遺跡群古墳時代前期の壺の口縁端部に施された×印

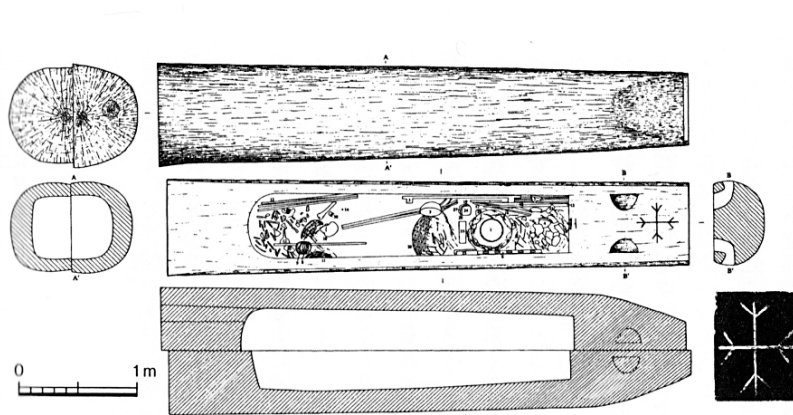


図 78 成都商業街船棺墓（中国） 8号船形木棺と十字形図文

上：図16 中国戦国時代の船形木棺に施された十文字

右：図17 佐賀県域の甕棺に施された十文字刻み

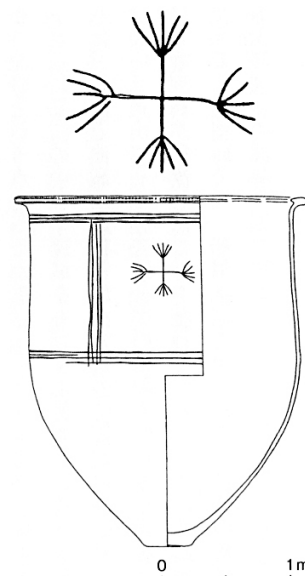


図 79 甕棺に刻まれた十字形図文（東山田一本杉遺跡）

図16・17ともに辰巳和弘2011『他界に翔る船』から

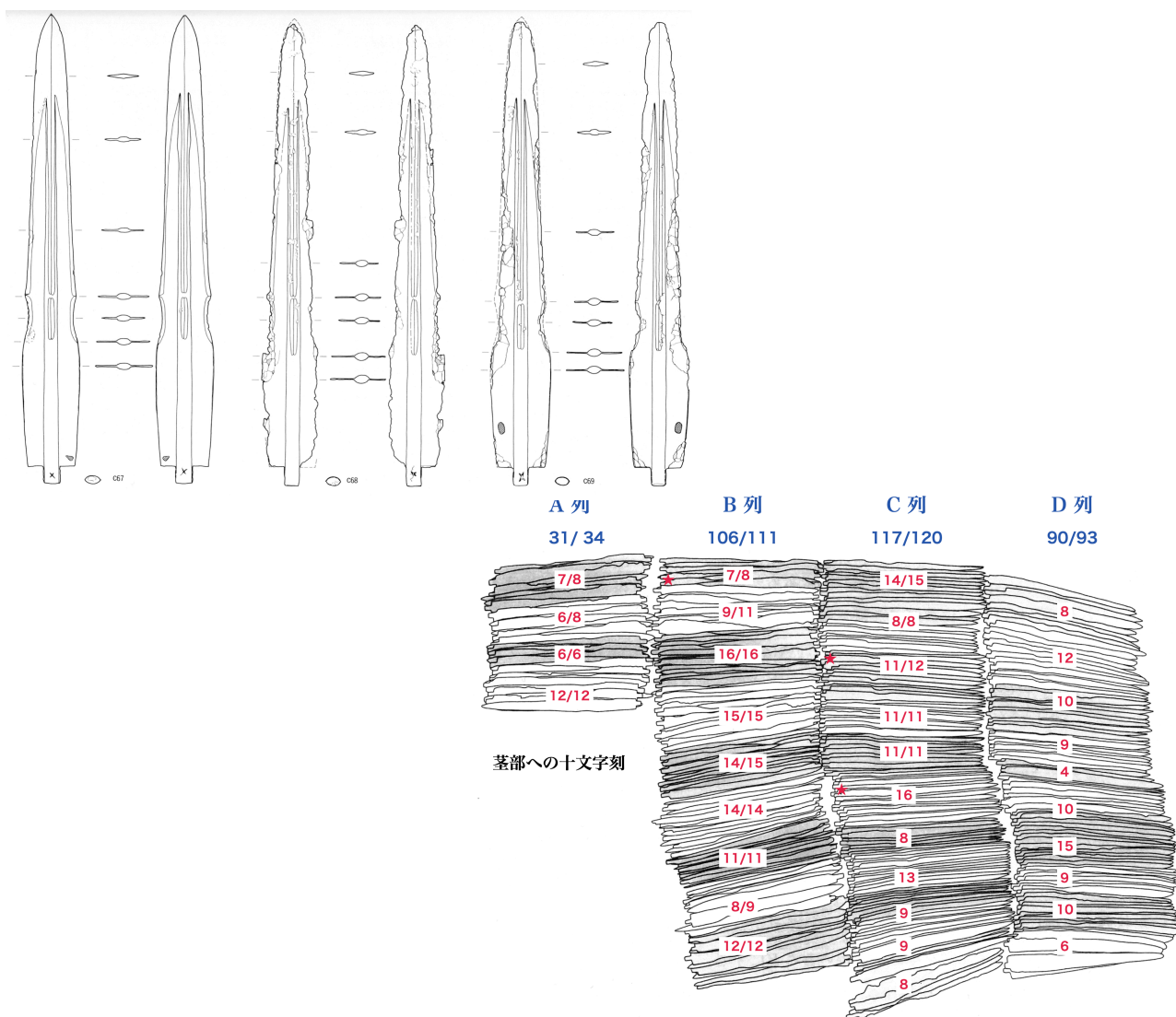


図18 島根県神庭荒神谷遺跡出土銅剣基部に刻まれた十文字刻み（図は報告書からの転載）

④ 古墳時代の箱式石棺墓に描かれた十文字の事例収集

* 熊本県玉名市大原箱式石棺墓には、側壁に*と船を漕ぐ人物が表された線刻壁面があり、類例として注目される（図19）。

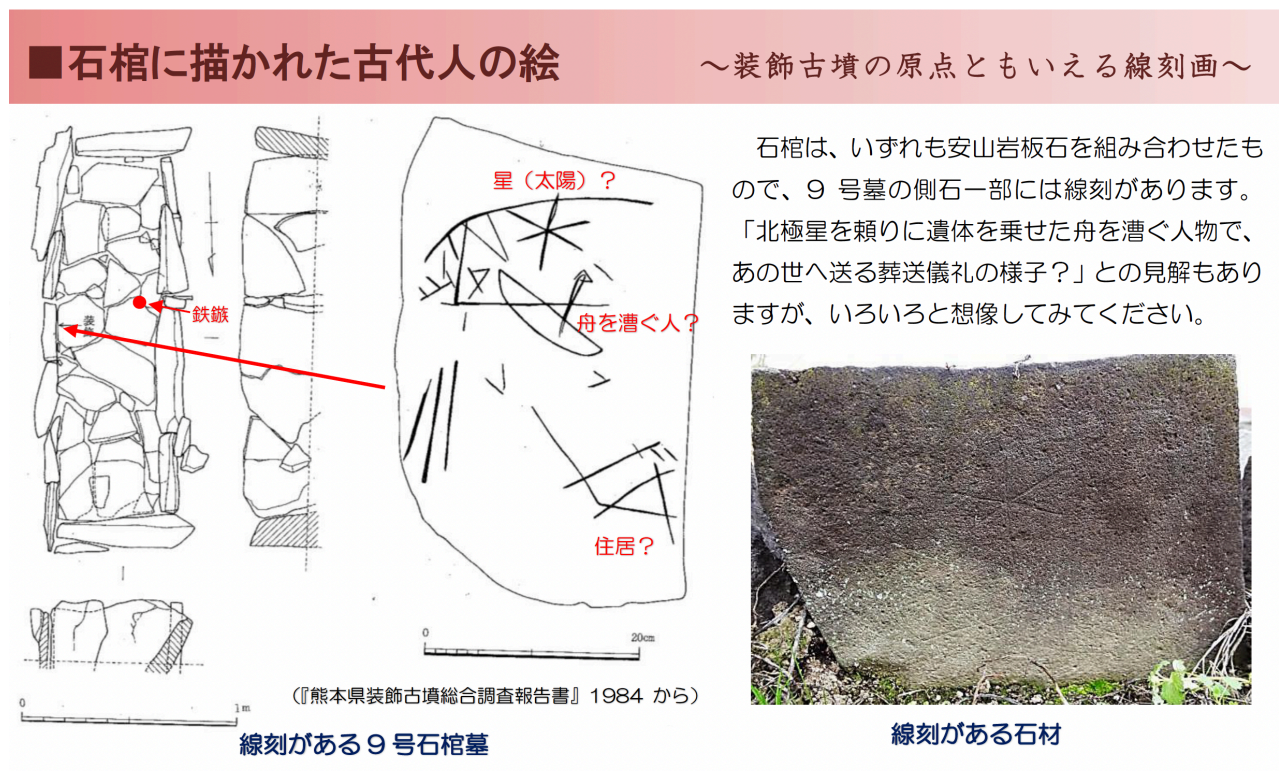


図19 熊本県大原箱式石棺墓の側壁面彫刻（パンフレットより）

3 古墳時代の装飾古墳や横穴墓に描かれた星辰図との比較

① 福岡県嘉穂郡王塚古墳（6世紀前葉、全長86mの前方後円墳）

後円部に設けられた九州型横穴式石室の羨道と玄室の全面は赤彩され、天井部を含め赤一色で塗られた上に、側壁の下半部には武具や巴形文などさまざまな壁画が描かれたことで知られる（図20）。なお石室の開口部は夏至の日の入り方位を向くので、夏の夕暮れ時には奥壁内部まで夕日が差し込み、石室構築後でも壁画を描くことは可能である。九州の装飾壁画古墳にはときにみられる工夫。

ここで注目すべきは壁画のない側壁上半部や天上面に、無数の黄色円文（珠文）が配されている事実である。玄室部上方に向けて広さを減じる持ち送りが顕著なため、天井にかけてドーム形を呈するように造作されている。この部分に点在する黄色円文（珠文）なので、それは星を表したものである可能性が高い。そのうえ天井にも無数の黄色円文（珠文）が散らばる（図21）。柳沢一男氏は2002年の著作『描かれた黄泉の世界-王塚古墳』（新泉社）において、これら珠文の構成は「直径5,6センチほどの珠文89個と5, 6ミリ程度の珠文94個が天井一面に描かれた構図は、まさに星座図だ」（柳沢2002, 70頁）と述べる。なお奥壁付近には遺骸を安置する石屋形が設けられ、石屋形の全周には青と赤と黄色に塗られた鋸歯文が描かれた。福岡教育大学の平井正則氏は、この構図を高句麗の古墳壁画と比較点検し、類似性を説いているとのことである（上掲書から-当該論文未検索）。

② 大阪府柏原市高井田横穴墓群第2支群11号横穴（6世紀後半が初葬）

2024年10月23日に高田と北條が現地見学を実施した。横穴墓は南に開口部をもち、墓室（玄室）は北向きで方位は真北から20°東に振れる（図19）。ドーム状を呈する墓室の天井から奥壁にかけてほぼ一列に2個の十文字と1個の*が刻まれている。3個共に刻みは磨り切り技法で施されている点が注目された。

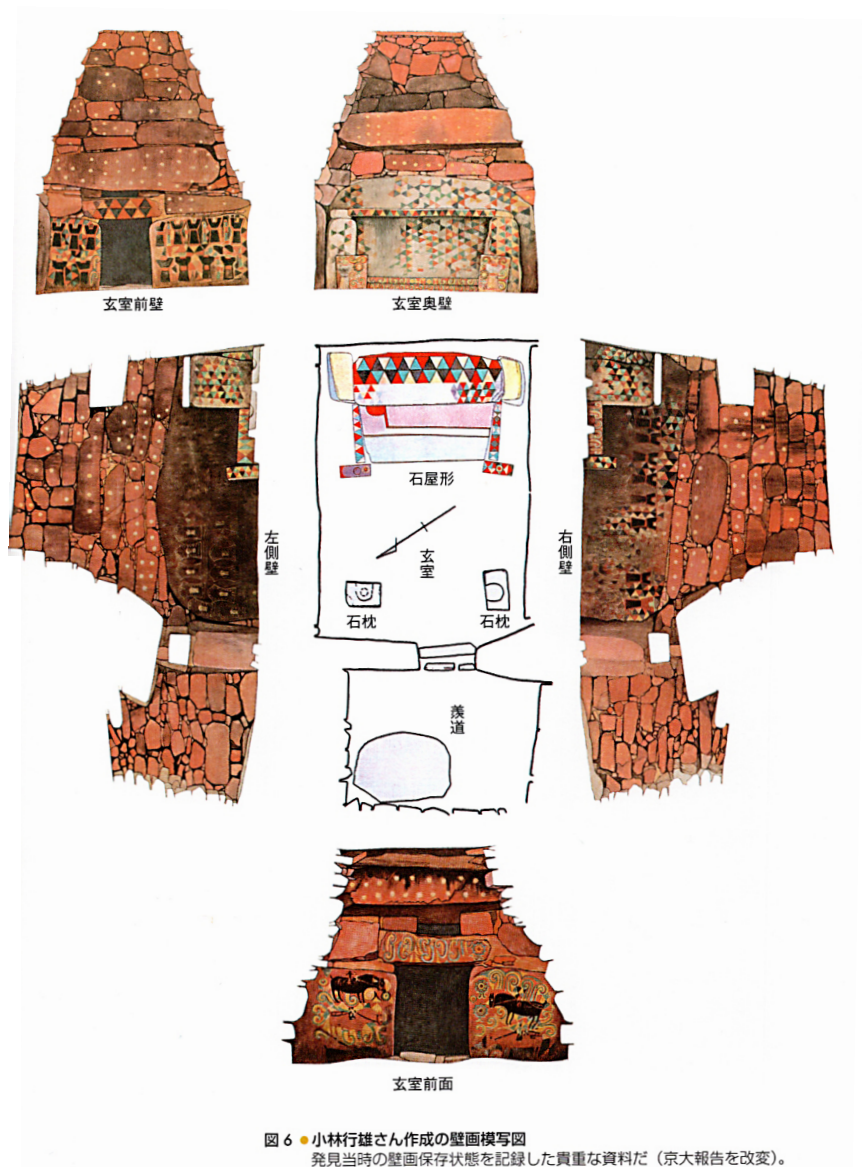


図6 ●小林行雄さん作成の壁画模写図
発見当時の壁画保存状態を記録した貴重な資料だ（京大報告を改変）。

図20 福岡県王塚古墳の装飾壁画（柳沢一男2002年著作より）



図60 ●玄室の天井
上：京大調査時の状態（京大報告より）。
下：日下八光さん模写図。

図21 福岡県王塚古墳玄室天井部の「星辰図」
（柳沢一男2002年著作より）

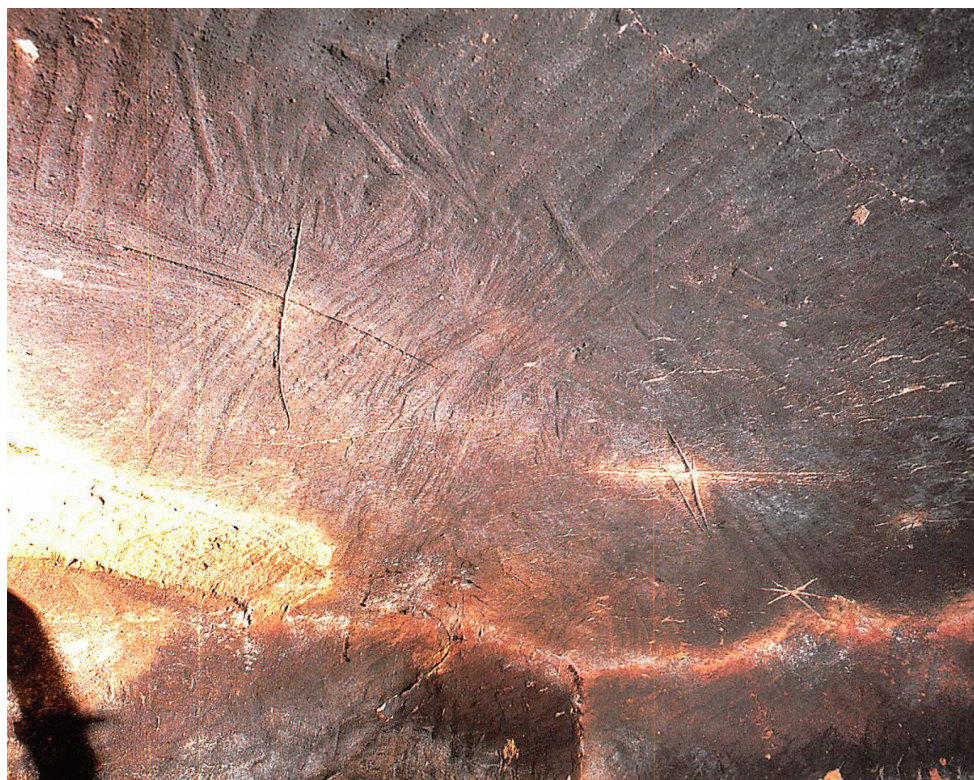


図22 大阪府高井田横穴群 2-11横穴天井の十文字刻みと＊（図録より）

最も入り口側の十文字は一辺の長さが89cmあり、直交ではなく斜交している。ドーム形の墓室の頂点に刻まれた2番目の十文字は、横方向に1.22m、縦方向には80cmの長さを持ち、縦のラインは単線ではなく平行する3条が一部重なり合って刻まれていた。横のラインも2条からなり、斜めに交わる格好で入口側端部で重なる。本例も直交ではなく斜交気味で、刻まれるラインの長さに比例して刻線も中心部分が深くなり、深さは1cmを越える。奥壁側の＊については、中心で交差する各ラインの長さが26cm、28cm、32cmと比較的揃い、バランスも良い。本例も磨り切り技法ではあるが、3個のなかで最も浅い。

高井田横穴墓群2-11号横穴については、ドーム状を呈する天井部の入口側から奥壁にかけて3個の十文字・＊が一行に並ぶ状態であるため、星辰関連モチーフである可能性が想起される。しかし十文字刻みが異様に大きく、頂点に刻まれた十文字刻みは縦横双方向に3条のラインが重なる状態で刻まれるという、他に類例のない状態であることが問題となろう。本横穴は第二次世界大戦中に民間の倉庫に再利用されていたという。ごく近年の改変加工である可能性も否定できない。ただし奥壁部の＊については他の2個の刻線とは明らかに様相が異なるため、本来のものであった可能性は高い。

③ 暫定的な所見

6世紀代の2例をみると、王塚古墳の玄室天井部には星辰図が描かれたとみて差し支えないと判断できそうである。個別の星は下地を赤とする黄色珠文（円文）で描かれていた。したがって7世紀の高松塚古墳やキトラ古墳の星宿図につながる先行的な様相だといえる。

その一方、彩色壁画ではなく線刻画である場合には、磨り切り技法にもとづく十文字刻みが星辰図の表現に充てられた可能性を指摘することまでは許されると思う。高井田横穴墓群2-11号横穴の入口側と天井頂部の2点の十文字刻みについては、残念ながら取り扱いを保留せざるをえないが、奥壁に刻まれた＊が根拠となる。入口側からみた＊の位置は真北から16°前後東に振れる。この角度は冬季の夕暮れ直後に北斗七星の柄の部分が直立する「斗建」の方位（T.N-15°-E）に近似する事実も注意してよいであろう。

吉野ヶ里遺跡の箱式石棺墓の年代にはほど遠いが、蓋石1が遺骸の天井部を飾る点との類似性までは指摘できそうである。